

ジョン・ヒック『自伝』と遠藤周作

間瀬 啓允

ジョン・ヒック『自伝』(John Hick, *An Autobiography*, Oxford: Oneworld, 2002)が出版された。『自伝』第24章には遠藤周作への言及がある。遠藤は本年(2006)で没後10年になるが、今もヒック『自伝』の中に生きている。

ヒックの経歴

ヒックは英語圏で最も影響力を持つ宗教哲学者である。1922年の生まれであるから、本年(2006)で84歳になる。高齢ながら嬰^{かくしがい}鑠として、いまでも執筆に勤しんでいる⁽¹⁾。

イングランドの港町スカーボロに弁護士の息子として生まれ、初めのうちは父親と同じ職業を志したが、法科の学生るとき、強烈な福音主義的回心を経験して牧師になることを決意する。しかし皮肉なことに第二次大戦が勃発して、勉強は頓挫。平和主義者であったヒックは良心的兵役拒否者としてフレンド派救急隊に加わり、エジプト、イタリア、ギリシアの各地を転々として難民救援活動に従事する。これがもとで、父親との間には確執が生じる。

救援活動の任務を終えると、エディンバラ、オックスフォードで哲学を修め、さらにケンブリッジのウェストミンスター神学院で神学を修め、1953年、念願の牧師になる。とはいっても、ノーサンバーランド州ベルフォードの田舎牧師である。長くは続かなかつた。幸いなことに(とすべきか)、牧師在任中にコーネル大学から招聘があり、迷わずに渡米。コーネル大学で宗教哲学を講じ、さらに名門プリンストン神学校でも教えた。帰国すると、しばらくの間、講師としてケンブリッジで教えたが、その後15年間(1967～1982)、バーミンガム大学に腰をすえて宗教哲学を講じた。さらに教職最後の10年間、再び渡米して、カリフォルニア州のクレアモント大学院大学で教えた。そして古希

を迎えた1992年、教授の職を辞して、帰国。以来、バーミンガム大学に近い閑静な住まいで書物に囲まれ、読書に、執筆にと、悠々自適な生活をおくっている。

ヒックの実践

英国バーミンガム大学に在職中、ヒックは「多-信仰」(multi-faith)のための奉仕活動に従事し、ヒンドゥー教、シーク教、イスラーム、仏教の信者たちと親しく交流する。そして宗教を多元主義的に理解するようになる。その実践の成果は、『受肉神話』『メタファーとして読む神の受肉』等の著書にまとめられ、宗教多元主義への道を拓くことになる。しかし、この道は易しいものではなかった。激しい論争の渦中で、「反キリスト教徒」「無神論者」「多神教徒」「中途半端なポストモダニスト」と酷評され、異端視された。このように教会の保守陣営から激しく攻撃されながらも、良心的キリスト教思想家として信念を貫き通したことが、『自伝』には克明に記されている。

中でも、特記すべきはバーミンガムにおけるAFFORの活動である⁽²⁾。AFFORは 'All Faiths For One Race' (「すべての信仰は人類全体のために」)の略で、これは民族混合都市バーミンガムにおける一般市民の社会的、宗教的活動であった。ヒックはバーミンガム大学在職中の全期間、この活動にコミットし、ムスリム、ヒンドゥー、シークの直面している社会的、宗教的問題に深く関わった。また、当時の(そして現在も続いている)深刻な人種差別の問題にも果敢に挑戦した。例えば、1976年、AFFORの活動の一環としてヒックは「国民戦線と国民党のネオ・ナチズムーキリスト教徒への警告」と題するパンフレットを書き、英国のネオ・ナチ指導者たちによる暴力的犯罪の全貌を暴いた。そしてその翌年、さらに「今日の英国におけるキリスト教と人種問題」と題するパンフレットを書いて、市民の啓発に当たった。このとき、ヒックは多くの人種差別主義者から猛反発を受け、脅しの手紙を何通も受け取った。しかし冷静に対処し、次の文面を以って応えた。「…あなたが歓迎するにしろ、しないにしろ、この国の黒人市民は、大部分が、この国からは離れられないのです。彼らの40パーセント以上がこの国で生まれ、他に帰るべき母国を持たな

いのです。ですから、彼らに対するあなたの憎悪と敵意が、新たな多元主義的英国社会の明るい未来を築くことに貢献するか、あるいはその明るい未来を阻むものになるかということ、私と共に考えていただきたいのです⁽³⁾。

AFFORの活動は1970年代から1980年代半ばまで続いたが、その間に、多信仰間の対話や宥和、多宗教の情報源としての「まちの図書館」づくり、多人種・多民族の集う「コミュニティ」づくり等々、実に多くの公益活動を行った。ヒックはこうした活動の現場に身をおいて、「宗教多元主義」の理論を実践的に創造していったのである⁽⁴⁾。

宗教多元主義

自分の宗教を中心にすえて、他の宗教はみな自分の宗教の周縁にあると考えるかぎり、他の宗教に対する適正な関わりは出てこない。このような考えにとらわれているかぎりでは、現代における宗教的課題である「宗教の神学」(Theology of Religions)も「世界神学」(World Theology)も構築することはできない。そこでヒックは、こうした現状認識を深めたうえで、現在のキリスト教徒やキリスト教神学者たちに必要なのは「宗教理解におけるコペルニクス的転回」であると考えた。つまり、宗教の宇宙というのはキリスト教中心でも、これに代わるどの宗教を中心にしたものでもない。それはただ「神」を、あるいは「神的存在者」(the Real)を中心にあまわっている。「神」が、あるいは「神的存在者」(the Real)が、いわば太陽であって、すべての宗教はそれぞれのしかたでそれを反射しているにすぎない、と考えたのである⁽⁵⁾。

また、宗教が異なっても、あるいは礼拝が異なっても、本質的に異なるものがある。それは(とヒックは考えた)、宗教者や礼拝者がより高い実在に向けて心を開いているという事実である。どうして人は自分以上の「より高い実在に向かう」のかというと、人間存在が根本的に欠陥のあるもの、不足をもつもの、つまりは墮落した世界における墮落した生、自我中心の幻想にとらえられ、苦にさいなまれた生だからである。けれども人間存在の変革を通して、つまり「自我中心から神的存在中心への人間存在の変革」を通して、人間は神の国に参入したり、涅槃に到達することができる。世界は本性上、慈愛に富み、

恵みに満ちているからである。このような人間的生の現実的変革は、事実として、どの偉大な世界宗教にも生じつつある。したがって、どの偉大な世界宗教にも救いは生じつつあると認めることができる。このことを世界の諸宗教は率直に認め合おうではないか。これが宗教多元主義の強い主張なのである。宗教多元主義とは、(とヒックは言う)、「自我中心から実在中心への人間存在の変革がすべての偉大な宗教的伝統内において、さまざまに異なるしかたで生じつつあると認める見解のことである。救いの道、開放の道がただ一つしかないというのではなく、その道が多数あることを認める見解のことである。したがって、諸々の宗教的伝統は、どれも人々がそこに救い・解放・完成を見出すことのできる救済論的「場」、あるいは「道」と見なされるべきものなのである」⁽⁶⁾。

ヒックの業績

実践的創造としての宗教多元主義の理論は、45年以上にわたるヒックの研究と教育の生活の上では後半期の成果に属するが、その45年の全期間を通じて、彼は多くの斬新な概念を提示し、宗教哲学に大きな貢献を果たした。その例証として「認識的距離」(epistemic distance)、「何かを何かとして経験すること」(experiencing-as)、「イレナエウス型神義論」(the Irenaean type of theodicy)、「生き写し論」(the replica theory)、「中間的終末論」(pareschatology)、「終末論的検証」(eschatological verification)、「カテゴリーを超えた実在者」(the transcategorical Real) 等々がある。

ヒックの著書は30冊以上に及ぶが、中でも『宗教の哲学』(*Philosophy of Religion*)は標準的なテキストとして、広く世界の大学で読み継がれている⁽⁷⁾。またギフォード・レクチャーを収録した『宗教の解釈』(*An Interpretation of Religion*, 1989, 2004)は、重要な宗教研究書としてグレウィマイヤー賞を受賞した。他に、主要な著作としては、『信仰と知識』(*Faith and Knowledge*, 1957, 1966)、『悪と愛の神』(*Evil and the God of Love*, 1966, 1977)、『死と永遠の生命』(*Death and Eternal Life*, 1976)、『受肉神話』(*The Myth of God Incarnate*, 1977)、『宗教多元主義の諸問題』(*Problems of Religious Pluralism*, 1985)⁽⁸⁾、『受肉神というメタファー』(*The Metaphor of God*

Incarnate, 1993, 2005)⁽⁹⁾、『諸信仰の虹』(The Rainbow of Faiths, 1995)⁽¹⁰⁾が挙げられる。

上に見るように、ヒックの知的関心は認識論、形而上学、神義論、キリスト論、終末論(超心理学を含む)、世界宗教、神秘主義、宗教経験へと続き、さらには宗教経験の神経科学への関係にまで及んでいる。そのためヒックの名前はさまざまな研究グループの間で、またさまざまな理由から、広範囲にわたって知られている。例えば、ある研究グループでは宇宙の宗教的曖昧さや物理主義的自然主義の不適切さ、あるいは信仰の認識論、宗教経験の妥当性について著述した宗教哲学者として、また別の研究グループでは悪の問題について、また神の受肉という概念の有する^{メタファー}隠喩的性格について著述した神学者として知られている。しかし、ヒックが最も広く知られているのは、後半期の約20年間における業績によってである。この間に、彼は、どの世界宗教も、彼が「実在者」(the Real)と呼ぶところの、言語を絶した超越的実在への、さまざまに異なる形での、真の応答に他ならない、とする宗教解釈を提唱した。これは宗教を多元的に解釈する「宗教多元主義」の主張である。遠藤周作は最晩年の作品『深い河』の創作にあたって、強くこの思想から影響を受けている。(このことは後述する。)

ヒックの訪日

ヒックは1987年と1989年に訪日し⁽¹¹⁾、そのときのメモワールを『自伝』第24章において、「東洋仏教との出会い」として詳論している。実はこの章の終わりの部分に遠藤周作への言及がある。

京都では、禅の老師たちとの対話を楽しんでいる。東福寺の福島慶道老師を訪ね、僧院の窓越しに木々の緑を見やりながら、老師が達した悟りについて尋ねている。老師はしばし沈黙を保ち、やがて窓越しに身振りで示して、ポツリと言う。「私はこの全ての一部となった」。「古松は般若^{はんにや}を談ず」という禅問答なのだろうか。

京都学派の指導者で、古典的な名著『宗教と無』で世界的にも有名な、西谷啓二氏にも会っている。ヒックが自分の著書『神は多くの名前をもつ』⁽¹²⁾を

手渡すと、西谷先生は「悪魔も多くの名前をもつ」と呟いたとか…。石庭で有名な龍安寺の盛永宗興老師にも会い、宗教対話を交わしている。

天理にも訪ねている。天理教の家族たちが熱心に参詣し、心を癒され、社会奉仕に勤しんでいる姿を見て、彼らの献身と利他の精神にいたく感銘する。しかし本殿の内側に、まさに世界がそこで創造されたと断言する天理教のドグマには強く疑問を抱いたようである。

ヒックの著作と研究書は日本語、中国語、韓国語に翻訳されて多数出版されている。とりわけ日本におけるヒック研究を高く評価し、「宗教多元主義をリードする二人の日本人主唱者のうちの一人」として筆者（間瀬）を名指し、長年にわたる筆者との交流を懐かしく思い出してくれている。「彼とその家族は私たちの家をよく訪ねて来てくれたし、私も彼の慶應大学で講義をしたとき、新横浜の近くの彼の家に泊めてもらった。私たちは家族ぐるみの、長期にわたる良き友である。ヒロマサ（啓允）の妻であるソノエ（園恵）は私の80歳の誕生パーティに、夫の代わりとしてバーミンガムまで来てくれた。また当時スウェーデンで宗教多元主義に関する研究を博士課程で進めていた彼らの娘エミ（恵美）と彼女の小さな息子ゲン（玄）も一緒に来てくれた」⁽¹³⁾。

遠藤周作への言及

『自伝』第24章における遠藤周作への言及を、本文のままに記せば、次のようになる⁽¹⁴⁾。

つい最近になって、私は数々の文学賞を受賞し、グレアム・グリーンが「私にとって遠藤は現存する最高の小説家の一人だ」と語った日本の小説家、遠藤周作（1923-1996）を知った。彼の作品は28カ国語に訳されている。遠藤の最後の小説は『深い河』で、死後、その創作日記が三田文学から出版された（1997）。この日記には『深い河』の創作準備のことが書かれている。彼は東京のある書店に入り、ある本と出会う。それが

ヒックの『宗教多元主義』だった。これはまるで私の意識下が探し求めていたものがその本を呼んだというべきであろう。…この衝撃的な本は一昨

日以来私を圧倒し、偶々、来訪された岩波書店の方に同じ著者の『神は多くの名前をもつ』を頂戴し、今、読みふけっている最中である。…仕事場に行き読書と仕事だが、ヒックの衝撃的な本を読んだ後は何を開いても味がなく、仕方なしに大盛堂に残暑の汗をかきながら赴くが一冊も買いたい本なし。…ヒックは基督教神学者でありながら世界の各宗教は同じ神を違った道、文化、象徴で求めていると述べ、基督教が第二公会議以後、他宗教との対話と言いながら結局他宗教を基督教のなかに包括する方向にあると批判している。そして本当の宗教の多元主義はイエスをキリストとする神学をやめ、つまりイエスの受肉の問題と三位一体の問題にメスを入れるべきだと敢然として言っているのである。

間瀬啓允は「月曜会」での講話を遠藤から頼まれたことや、その講話を遠藤がとりわけ熱心に聞き入っていたことを伝えている。遠藤はその日の日記に「ヒックの神学についての話し。パネラーの間瀬教授と門脇神父の間にイエス論をめぐって激論。というより喧嘩。外は烈しい雨。司会者の私はヒックの考え方と従来キリスト論の間に引き裂かれて当惑した」と記している⁽¹⁵⁾。

『深い河』では、カトリックの司祭になるため勉強しつつも伝統的な信仰には馴染めず、ついその見方からはみ出て行くので教会からは受け入れられずにいる大津という若者によって、多元主義のテーマが描かれている。大津の手紙には、

教会の聖職者たちを前にして、馬鹿なことを言ったと今では多少の後悔をしています。しかし、ぼくは人がその信じる神をそれぞれに選ぶのは、生まれた国の文化や伝統や各自の環境によることが多いと、当然のことながら思うのです。ヨーロッパの人たちがキリスト教を選ぶのはその家庭がそうであったり、その国に基督教の文化が強かったりするためでしょう。中近東の人たちがムスリムになったり、印度人の多くがヒンズー教徒になるのも、他の宗教と自分のそれとを厳しく比較して選んだとはいえないでしょう。…神は色々な顔をもっておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも

神はおられると思います⁽¹⁶⁾。

二度の訪日を通し、私が経験した素晴らしいもてなしに心を熱くしつつも、同時に、日本文化の不可解さに心を惑わされもした。他に中国や韓国からも招きはあったが、その都度いろいろな理由からそれに応じることができなかったことは、いま思えば残念だ。しかし私の考えの幾ばくかが、西洋の私たちにとってその伝統が極めて深くまた貴重でもある極東の国々において認知され、考察されているように思えることは、まことに幸せなことである。

言及の「きっかけ」

以上が『自伝』第24章の終わりの部分である。ヒックが『自伝』に遠藤周作を書き留めることになったそもそもの「きっかけ」は、私が慶應義塾大学在職中に、日吉紀要『人文科学』に投稿したエッセー（英文）「遠藤周作と宗教多元主義—『深い河』創作日記をめぐって—」をヒックに送ったことにある⁽¹⁷⁾。その後、ヒックはすぐさま私を介して、遠藤順子夫人に弔辞を送った。そうしたのは、幾年か前に見送った愛妻ヘーゼルへの思慕が重なり、最愛の人を亡くしている順子夫人への細やかな配慮が働いたからであろう。

今年5月、長崎の大浦天主堂で行われた「遠藤周作とすべての切支丹のためのミサ」のことを伝えると、ヒックは「没後10周年のことは忘れていた。合同ミサで追悼行事をすることは、日本の良い風習ですね」と早々に、メールで返事をくれた。その短い言葉の中に、私は全世界に宗教多元主義を唱導する人の、広くて深い慈愛の心を読みとることができた。

ジョン・ヒック『自伝』は、本年（2006）11月5日に、日本橋浜町にある出版社トランスビューから出版された。また、鶴岡市では、同じく本年11月11日（土）に、国の重要文化財である鶴岡カトリック教会天主堂において、市民の有志（歴史資産のなかで朗読・音読を愉しむ会）による遠藤周作『深い河』の朗読会が催され、盛会であった。

注

- (1) 本年(2006)8月15日付のメール: ロンドンのマクミラン社より本年11月に出版予定で、次の著書を執筆中。*The New Frontier of Religion and Science: Religious Experience, Neuroscience, and the Transcendent*.
- (2) John Hick, *An Autobiography* (Oxford: Oneworld, 2002), Chaps. 15-16. (間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝』トランスビュー、2006(11月5日に刊行)、第15-16章)。この内容については、本年(2006)9月開催の日本宗教学会(於、東北大学)において、「ジョン・ヒック自伝に見るAFFORの活動」と題する研究発表の中で明らかにした。
- (3) *An Autobiography*, p.189.
- (4) ちなみに、ヒック『自伝』邦訳の副題は、「宗教多元主義の実践と創造」である。
- (5) John Hick, *God Has Many Names* (London: Macmillan, 1980), p.52. (間瀬啓允訳『神は多くの名前をもつ』岩波書店、1986、110頁。)
- (6) John Hick, *Problems of Religious Pluralism* (London: Macmillan, 1985), p. 34, pp.36-37. (間瀬啓允訳『宗教多元主義』法藏館、1990、70、74頁。)
- (7) 邦訳には、*Philosophy of Religion* 2nd edition, 1973 間瀬啓允訳『宗教の哲学』改訂版 培風館、1975年、及び同書 4th edition, 1990 間瀬啓允・稲垣久和訳『宗教の哲学』勁草書房、1994年がある。日本語のほかに、フィンランド語、スウェーデン語、スペイン語、ポルトガル語、韓国語、中国語にも翻訳されている。
- (8) 邦訳は、間瀬啓允訳『宗教多元主義—宗教理解のパラダイム変換—』法藏館、1990年。
- (9) 邦訳は、間瀬啓允・本多峰子訳『宗教多元主義への道—メタファーとして読む神の受肉—』玉川大学出版部、1999年。
- (10) 邦訳は、間瀬啓允訳『宗教がつくる虹—宗教多元主義と現代』岩波書店、1997年。
- (11) 最初の来日(1987年)では比較思想学会(於、大正大学)、国際シンポジウム「アジア太平洋文化の歴史と展望」(於、天理大学)、慶應義塾大学、立教大学、京都大学、花園大学、龍谷大学で講演した。二度目の来日(1989年)では国際宗教・超心理学学会(於、東京砂防会館)、慶應義塾大学で講演し、多くの日本人の学者、研究者と交流を深めた。また、京都ではいくつかの禅寺を訪ね、老師たちとの宗教対話を楽しんだ。
- (12) 注(5)を参照。
- (13) *An Autobiography*, pp.285-286.
- (14) *ibid.*, pp.286-287.
- (15) 遠藤周作「『深い河』創作日記」講談社、1997年、38頁。

(16) 遠藤周作『深い河』講談社、1993年、191-192頁。

(17) 'Shusaku Endo and Religious Pluralism – in relation to his *Journal of Deep River*'. 「遠藤周作と宗教多元主義—『深い河』創作日記をめぐって—」慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』第14号、1999年。